



愛隣幼稚園.....

園だより

..... 14. 5月号

さかながカエル？

「せんせい、かぶとむしのようちゅうみつけた！」ゆめ組の男の子が小さな白い幼虫(多分こがねむし)を手のひらにのせてやってきました。春になって小さな命が園庭のあちこちで動き始めました。たんぼぼ組のK君は、おたまじゃくしを手に登園。今、たんぼぼ組のテラスの小さな水槽で元気に泳ぎまわっています。たんぼぼ組とばら組の子どもたちが水槽の水を揺らしながら頭をつき合わせて覗き込んでいました。「これ、何か知ってる?」「・・・」少し間が空いてばら組が「おたまじゃくし!カエルになるんだよね。」と答えてくれました。そのばら組さんたちと、おたまじゃくしがどんなふうにかエルに変身するかという話をしましたが、たんぼぼ組の子どもたちは不思議そうな顔で聴き入っていました。足が出るとか、手が出るとか一体全体どういうこと?と思ったにちがいません。せっかくですから、この子たちとおたまじゃくしの変身を見届けたいと思っています。

たんぼぼ組の子どもたちはまだおたまじゃくしを知らないようでした。珍しい生き物ではありませんが、身近な生き物でもなくなったようです。家で飼うことももちろんなさそうです。小さな命を身近に感じる機会がだんだん少なくなってきています。

今年の3月、生き物好きな我が家にうさぎがやってきました。うさぎを飼う条件はもちろん娘たち3人がその世話をすることでしたがやはりこれがいちばん大変。これまでもいろいろな生き物の世話をしてきた娘たちですが、毎日のことを欠かさず続けるのは難しい。命のお世話をするには手を抜けないという自覚を持っていただくために、娘たちとバトルを繰り返すことになりました。想定内とはいえこのバトルには辟易します。まあそれでも飼うのですから私が覚悟しなければということでしょうか。ところで皆さんのご家庭では、何か生き物を飼っていらっしゃいますか?命のお世話をするということは我が家のうさぎほどではなくてもちょっと大変です。自分のことはさておいて、掃除をしたり、餌をあげたり。それこそ子どもたちに任せるわけにはいきませんから“とてもじゃないけど虫を飼うのも無理!”そんな声が聞こえて当然です。それでもやはり、小さな生き物たちが子どもの近くにいるのはいいと私は考えています。子どもたちと小さな生き物たちとの出会いは子どもたちの世界を広げます。おたまじゃくしを見ていたたんぼぼ組。“このさかなのようなものが、どうしてカエルになるの?”ふしぎだなあ?なんでだろう?おもしろそうだなあ?・・・?マークがいっぱいです。心が動き、頭も動き出します。?を確かめたいと自ら動き出したら小さな世界は広がっていきます。“さかなから足がはえた!!”“えーっ”“ほんとだ!”大人にとっては当たり前のことも子どもたちには大きな驚きです。さかながカエルになった姿を見たらちょっと感動です。かなへびもあげはちょうもだんごむしにも?マークがいっぱいです。でもそれに気付くためにはこの生き物たちとの距離を縮める必要があります。さっきの話のようにそれ相応の覚悟をして飼っていただいただけだと嬉しいのですが、もしそれが叶わなくても子どもたちと一緒に、かがみ込んでこの生き物たちの世界を覗き込んでみてほしいのです。?を見つけてください。?の世界を子どもと共感してください。人の力が及ばない命の不思議さに出会ったとき、心が動きます。子どもの世界は広がり豊かになっていくはずです。この命がここにあることを理屈でなく尊重できる心の豊かさを持ってほしいと願います。これはバーチャルな世界では経験できません。小さな生き物たちに興味が湧いたら、かなへびとかぶとむしの幼虫には先生の部屋で、あげはちょうの幼虫はみかんの木で、だんごむしには園庭の隅っこで、出会うことができますよ。